京都大学経済学部同窓会会報

京都大学経済学部同窓会 〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学経済学部内

ご挨拶

京都大学経済学部同窓会会長
株式会社企業再生支援機構
代表取締役社長
西澤宏繁

私は昨年十一月十三日、京都大学経済学部同窓会で辻井前会長の後任に推されて同窓会会長に就任いたしました。甚だ微力でございますが皆様方のお力添えをいただいて、いささかなりとも役割を果たすべく努力してまいりたいと存じますので、どうかよろしくお願い申し上げます。

私自身は昭和三十六年卒業で日本興業銀行に入り、平成九年東京都民銀行に転じ、平成二十一年現職に就いたのですが、今年丁度卒業後五十年、半世紀を経たところであります。

卒業後半世紀と言うとやはり人生のひとつの区切り点と言えましょうか。

実はこの五月三十日、「経済学部昭和三十六年卒業五十周年記念同窓会」が時計台ホールにて田中経済学部長にもご臨席いただいて、九十一名が集い、盛大に催されました。

この一学年全体を網羅した経済学部独特の「卒業五十周年記念同窓会」は昭和三十年卒業の先輩方が自発的に始められたもので、以降毎年ノーハウ等が、語り継がれ引き継がれて七年間続いて開催されるに至っているものです。この間、歴代学部長や同窓会事務局等関係各位の御力添えのもとに、そして何よりも有志の諸氏がボランティア幹事役として御尽力されることによって経済学部同窓生の恒例の行事のような感じにまでなってきているのであります。

この卒業五十周年記念同窓会の日にかけてクラス会やゼミの同窓会等も盛んに行われております。これを機に名簿がやっと完成したクラスの話や五十年ぶりに会って交友が復活した話とか、色々と結構なお話を沢山耳にしております。卒業五十周年記念同窓会が自発的に毎年開催されていることは、同窓会活動の基盤がしっかりしていることを示している心強い例でありましょう。

東京支部で年三回のペースで開かれている経済懇話会は、大学から毎回教授陣に上京いただき、タイムリーにして本質的課題に関わるテーマを講義いただいており、大変好評で、毎回百名を超す参加者となっております。この六月例会で第三十一回目、実に十一年目を迎えることとなります。学部当局、同窓会事務局にはテーマ選定、講師選出等お骨折りいただき、正に同窓会冥利と言うか、大学との絆のありがたさを実感するものであります。

最近は他学部からの参加者も歓迎しており、集まった若手がその縁を契機に若手会を発足させる例も生まれております。

近畿地区では京滋奈、大阪、神戸の三支部の念願であった統合について、行事・イベント等の充実、見直し等検討が重ねられ、それぞれの機関決定がなされ七月予定の新理事会で名称をはじめ具体的内容が決定・発表されるとのことです。若手会員への参加呼びかけ等も含めて支部活動の拡充を図っていきたい旨のお話を承っております。今後東西で連携・相互啓発が行われると見られ、さらに名古屋地区への声かけや、同地区の活性化も期待されましょう。

九州南・北部各支部やその他地区の皆様も各々御工夫いただいておりますが、地方によっては経済学部の枠にとらわれず全学ですすめる方が現実的でありましょうから、出来れば経済学部同窓会の方々が触媒役をしていただければよいかもしれません。

申すまでもなく同窓会は、卒業生相互の親睦を深める場であり、同時に卒業生と大学とのコミュニケーションの場でもあり、卒業生が母校の発展に協力していく場でもあります。まさに同窓会を構成する人々の意識如何が大切であることは、言を待ちません。

大学が独立行政法人（国立大学法人）に変ってから八年目、その間大学では様々な改革・工夫がなされ、同窓会についても極めて積極的に対応いただいております。

松本総長のグローバルな側面も含めての同窓生、同窓会への目配り・行動は正に氏の「京都大学は…豊饒な人間関係が美しく綾なす大学でありたい」と言う思いの反映でしょう。松本総長の決断によってついに実現した京都大学東京オフィス。その開設にあたっては、経済学部同窓会はそのお願い申し立て人の一人でありかつ場所探しを決定的にお手伝いさせていただいた経緯がありますが、今や大いに活用させていただいており、心から感謝申し上げる次第です。

今後全学同窓会がその機能を発揮されるにあたっては経済学部も然るべく連携すべきではないでしょうか。少なくとも東京支部ではその方向を志向していただいております。

田中経済学部長に承ると、八年後の経済学部一〇〇周年を期して同窓会との連携を一層強めたいとのご方針であります。今年の施策としては、学生向けの諸施策に加えてOB、教職員、院生等が居心地良く語り合えるスペースとして「コモン・ルーム」を創設して同窓会との接点にもしたいとのことです。

平成二十一年から始められた新入生の同窓会特別会員受入、これは入学時から同窓会の認識を高めて行き、同窓会若手会員増加を目標とした訳ですが、まだ改善の余地が大きいとのことであり、同窓会も協力すべきテーマでしょう。

東日本大震災からどのように我が国が再起し、どのような国造りを遂げようとするのか、日本国民、誰しもそれなりに真剣に考えずにおられない、厳しい状況の中に今、私達は居るのだと思います。

そんな中で改めて「絆」について認識を深め、強めている人々が多いのではないでしょうか。絆と言う言葉・概念がこんなに多く目につくことは近時なかったように思います。

同窓会はこの絆の典型のひとつでしょう。「京都大学経済学部卒業生」としての絆を大切にしていこうではありませんか。

卒業生名簿の発行について

昨年８月に京都大学経済学部・経済学研究科修士課程卒業生名簿を発行いたしました。

この名簿は、同窓会年会費を納入していただきました会員様に、無償で配布しております。（※在庫がなくなり次第、配布終了とさせていただきます）

◇

同窓会総会のご案内

平成23年度経済学部同窓会総会を下記の日時に開催いたしますので、何かとご多用のことと思いますが、会員諸氏お誘いあわせの上、ご出席賜りますようご案内申し上げます。

詳細につきましては、同封のご案内状をご参照下さい。

記

日　時　　平成23年11月12日（土）14時30分～18時
場　所　　京都大学百周年時計台記念館　２F　国際交流ホール

◇

会費納入のお願い

平成23年度（23年4月～24年3月）の同窓会年会費5,000円を同封の払込用紙で、納入下さいますようお願い申し上げます。

京都大学経済学部同窓会事務局
住　所：〒606-8501　京都市左京区吉田本町
TEL：075-753-3419
【京都大学経済学部同窓会ホームページ】
http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/~dosokai/D-index.html
なお、ご住所変更の折は必ずお知らせいただきますよう、お願い申し上げます。

京大経済学部_同窓会報14号.indd 1　11.8.4 2:45:31 PM

ごあいさつ
経済学部の近況

京都大学経済学部同窓会理事長
大学院経済学研究科長
経済学部長
田中秀夫

経済学部は創立九十三年目を迎えました。昨年、学部長に選出され、二年目を迎えましたが、私の役割は一〇〇周年を視野において、学部・研究科を発展させる礎石を築くことであると考えました。それまでの学部長も、もちろん私情を捨てて、学部・研究科のために尽力されたことは申すまでもありません。

私がまず着手したのは戦略企画室を設けることです。ここで概算の戦略を練るとともに外部資金の獲得を進めることにしました。第二に、研究推進支援室を設け、科研費獲得の大幅アップを目指すことにしました。その成果は双方とも著しいものがあると申し上げて過言ではありません。

そしてもっと大きな目標としては同窓会との関係をさらに緊密にすることを掲げました。必ずしも東京、大阪など支部の理事会につねに出席できるわけではありませんが、大学での総会には多くの教授が出席するようになったという変化を皆さんに感じ取っていただいていることと存じます。

同窓会に期待することは多々あります。人的交流を通じて、京大経済関係者の友好関係を強固にすること、そして経済学部に様々な形でのご支援をいただくこと、また社会の現場からアドヴァイスをいただくことも期待しております。

こうしてこれまでのみずほフィナンシャルグループの寄附講義「先端バンキング論」に加えて、本年度から学部の講義として三井住友銀行グループ（SMBC）の寄附講義「投資銀行業務とグローバル戦略」と京都銀行の寄附講義「京都経済論」が始まることになりました。SMBCの講義は前期開講で、法経七番教室が満員になるほどの盛況であります。金融の最先端事情に学生がいかに強い関心をもっているかの証左だと思っています。新しく始まった寄附講義は寄附金もつけていただいていますので、運営費交付金が年々削減されるなかで、非常に助かっているのですが、これが実現したのは同窓会の先輩方のお世話の賜であります。

長い景気低迷、就職不安、三・一一の東日本大震災などが学生諸君にストレスを与えているように思います。被災者支援が一方では熱心に行なわれていますが、福島第一原発が出口の見えない広範囲の放射能汚染を続けており、疲労感・閉塞感も強まってきました。こういう出来事がなくても問題を抱える学生はいましたし、学部として対応してきました。しかし、これからは以前にもまして不安や問題を抱える学生が増える可能性がありますので、学生相談窓口を常時開設して、相談に応じることにしました。

同窓会には一〇〇周年に向けていっそうのご支援をお願いしなければなりません。学部卒業五〇周年をお迎えになったOB会が毎年大学で開かれています。退職されました櫻田さんが長くお世話をされていました。今年は昭和三六年卒の集まりがあるのですが、学部にはOBが気安く利用できる部屋もないので、そのようなニーズを満たす部屋としてコモン・ルームを東館の三階に作ろうと考えています。外部資金を利用させていただきます。また講義室が不足していますので、二階の大会議室を教室に転換し、地下に会議室、情報演習室、演習室を設ける工事も行ないます。工事が完了すれば、経済学部・研究科はこれまで以上に教育・研究に邁進できると考えていますし、経済界やOB会、同窓会との交流をさらに深める基盤を形成できると考えています。寄附金を提供していただいたみずほフィナンシャルグループ、三井住友銀行、京都銀行に改めて厚くお礼申し上げます。

経済学部は今では大学院での研究者養成にも力を注いでいます。しかし若手研究者の専任ポストが必ずしも十分にあるわけではありません。優秀でも専攻によっては専任ポストを得られない場合が案外多いことは皆さんご承知のことと思います。

経済学研究科にも二〇人を越えるOD（オーヴァー・ドクター）がおりますが、希望者全員を今年から非常勤講師にしました。研究支援というわけで、「現代経済学・経営学の先端分析」と題するリレー講義をやってもらっています。それ以外に昨年から総長裁量経費で若手研究者の出版助成が始まりましたが、これは全学の事業となっていますので、ここでは割愛します。

経済学部の上海センターが東アジア経済研究センターと改称したことはご存じの方が多いことと思います。センターは協力会のご支援を得て活発にシンポジウムなどを行ない、特に中国の学者・要人との交流に力を入れています。これからもいっそう発展させていきたいと考えています。

また英語だけで学位が取得できる東アジア国際人材開発コースが三年目を迎え、この秋から優秀なドクターの学生を迎えます。

秋にはコモン・ルームができますので遠慮無くご利用いただきたいと思っていますが、同窓会等において長年活躍をされてきた会員のなかから、経済学部に特段の貢献をしていただいた方に報いたいと考えました。それで名誉フェローとフェローの称号授与を行ないたいという訳で、教員協議会（教授会）で規程を設けました。歴代の同窓会長などが候補になると思います。秋の総会でご報告したいと思っています。

元同窓会会長　鳥井道夫さん　ご逝去

本同窓会の元会長、鳥井道夫さん（サントリーホールディングス㈱名誉会長）が平成二十三年二月六日、肺炎のためご逝去されました。八十八歳でした。慎んでご冥福をお祈り申し上げます。

鳥井元会長は、昭和二十二年京都帝国大学経済学部のご卒業で、平成七年九月から十一年十月まで二期四年にわたり、会長を務められました。さらに平成十一年十月から平成十四年十月まで名誉会長を、その後も理事として同窓会の発展に多大なご貢献をされました。

お別れの会が四月二十一日に大阪中之島のリーガロイヤルホテルで行われ、同窓会を代表して理事長の田中秀夫学部長、大阪支部長の出田善蔵さんがご出席されました。

近況報告

名古屋に移りました

京都大学名誉教授
森棟公夫
（平成二十二年退職）

原稿の依頼を受け、京大最後の月々を思い起こしています。平成二十二年の新年になって直ぐにタイのチェンマイ大学であった学会で報告があり、その準備に平成二十一年末から追われていました。そのあとは三月の台湾での集中講義の準備に没頭していました。台湾の学期と旧正月のため、集中講義は三月三十日までの二週間の約束でした。二月初めには研究室を引き払い、名古屋に本を移しました。それだけではありません。短期間に、名古屋のマンションを探し、家の引っ越しをしました。壁紙貼り替えの注文、古いカーペットをフローリングに変える注文。新しい家での電化製品をそろえ、ジャパネット高田のテレビ・コマーシャルを見て、テレビも注文しました。台湾から帰国して、名古屋に体を移動するのは三月三十一日と決まっていましたから、直ぐ生活できるように計画をしたわけです。

新しい職場は名古屋と決まったものの、名古屋は全く未知の土地です。普通は家のある大津

から通ったりするのでしょうが、子供達が成人しており、家内が仕事を辞めたので、心機一転、引っ越しに決めていました。

三月七日（土）は、最終講義でした。これも半年くらい時間を掛けて準備をしていました。三月十五日（月）に教授会があり、そのあと退職記念の食事会をウェスティン都で開いていただきました。私は新しい経済学部が躍動を始めているのだということを感じ、大変気持ちが良かった。

翌朝台湾に出発して、台湾で約束の二週間を過ごしました。台湾での滞在は、講義に追われるという当初の予定と違い非常にリラックスしたものでした。家内も付いて行ったので、結果は退職慰安旅行になりました。気候もほどよく、果物も珍しく、台湾人の親切さは群を抜いています。講義に空きの日が出ると、直ぐ旅行に連れて行ってくれました。花蓮、太魯閣、阿里山、嘉義。台湾製糖の工場跡を見に行き、花蓮の阿美部落に行き阿美の人たちと食事をしたり。二日に一度講義をすればいいのか、とも思いました。分かっていれば、講義の準備も楽だったのですが。最後に台北では羅吉煊氏に思わぬご馳走になりました。羅氏のたっての希望は、李登輝氏を京大に招くということであり、これは後日おおいに困難なことが分かりましたが、一般的に言って、台湾人の親日に我々日本人はどう答えれば良いのでしょう。

京都の全てをかたづけて、三月三十一日に名古屋に移り、四月一日に椙山女学園大学で新しい辞令を受けました。

最終講義では、「私は十八の時京大に来て、京大に四十五年間居た」と講義を始めました。最終講義がU-Tubeに上がっているそうで、これを見た大学時代の友人が、講義はどうでも良かったようですが、この出だしにいたく感心して連絡をくれました。京大で教員だったのは三十四年半ですが、よく働きました。京大最後の月々は、様々な処理に追っかけられ通しで落ち着けませんでしたが、京大時代はずっとそうでした。精一杯よく働いたと思っています。台湾旅行という（自分で取ってきた）ご褒美がありましたが。

名古屋に移ってこの一年は調整期間でした。椙山女学園では授業の調整、家に帰ってはマンション生活の調整、そして僕はバドミントンで汗を流してリセットしますから、バドミントン機会の確保。全て上手く進みました。十九年乗った愛車も、名古屋ナンバーの新車に変わり、新しい車で、知らない土地を走っています。

椙山女学園で一年授業をして僕自身学ぶことも多く、今、統計学の新しい教科書を書き始めました。先日の東北大震災は、この本に取り組む大きなモチベーションになっています。それと、いつも考えさせられるのは国立とは違う私学の経営です。どうあるべきなのでしょうか。

りでは子供が飛び石伝いに渡れる鴨川の流れも、下っていくと最後にはこのように水量豊かになると思うとなぜか感動します。

学部が完成して四年生まで揃うと授業のコマ数は京大時代より重くなりますが、大学院生の指導がないので実質的な教育負担は似たようなものでしょう。昨年は学生が一年生しかいなかったので授業負担は軽いものでした。そのおかげで、念願であった経済学史の英文書Austrian and German Economic Thought: from subjectivism to social evolutionを今年はじめにRoutledgeから出版することができました。カール・メンガー以来のオーストリア学派経済学がドイツ語圏の経済思想に与えた影響をマックス・ウェーバーやシュンペーターまで辿り、私の最近の立場である進化的制度経済学にまで我田引水した著作です。はじめは既発表論文を全面的にかきかえた著作にするつもりでしたが、結局、これまでに書きためた論文の集成になってしまいました。というのも、それぞれに思い入れのある英文論文が海外研究者から無視されたままでいることに耐えられなかったからです。京大にいた時に河上肇が弟子に書き送った書の複製をもらいましたが、その中に、「凡そ学に志す者は知られざるを恨む勿れ、知らざるを憂へよ」とありますが、この戒めに反しました。しかしこれで気がすんだので、この領域での研究はもう続ける気持ちはありません。

経済学史・経済思想史の領域では、日本や東アジアの方に興味をおぼえていますが、やはり余力はオリジナルな理論・思想の方面に向けたいと思っています。自分としては、この十年ぐらい続けてきた制度経済学や進化経済学の勉強はその準備のつもりでした。この領域でもそれぞれ最先端とされる領域があって、世界の俊秀が競い合っています。しかし、既存文献のテクストに頼る経済学史の研究や、政策についてのディスコースの分析に頼る政治経済学に慣れてしまった六十歳代半ばの研究者にとって、それに加わるにはハードルが結構高いことも事実です。といっても、自分がやろうとしていることは科学ではなく哲学だと腹をくくれば、時代錯誤的なリテラリーなやり方で進んでもいいでしょう。それであれば、思想史や政治経済学の発想も役に立つことがあるかもしれません。この歳になれば、自分勝手なことをして恥をかいても何も困ることはないので、勇気を出して取り組みたいと思います。それでは、この決意表明が空手形にならないことを自分自身に祈りながら、またみなさまのご健康をお祈りしながら、京大定年退職後の近況報告といたします。

卒業生だより

淀川を下った寝屋川のキャンパスにて

京都大学名誉教授
八木紀一郎
（平成二十二年退職）

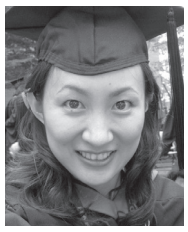
昨年の四月から、摂南大学という私立大学の開設されたばかりの経済学部で教えています。京阪沿線の寝屋川市にキャンパスがあり、理工学部、薬学部、外国語学部、法学部、経営学部、それに経済学部と六学部からなるそれなりの総合大学です。来年は看護学部を開設する予定です。知名度が低いのが難点と学内者自身がぼやいていますが、みなさん御存知ですか？

キャンパスに隣り合って日本ペイントの研究所や神戸パンの工場があり、すぐそばを国道一号線が走っています。ここでトラックの列を毎日ながめていると、京大にいた時よりもずっと現実の経済に近くなった気がして、二十年近く居た吉田山麓が仙人の住む桃源郷のように思えてきます。

といっても自慢できる風景が付近にないわけではありません。国道一号線をわたると淀川の河川敷が広がり、悠然と淀川が流れています。どこまで遡れるのか河船も行き来していて、ラインやドナウのような欧州の大河を思わせます。京都出町柳あた

社会人十五年目を迎えて

三好加奈子
（平成九年卒）



平成九年に経済学部を卒業し、はや社会人十五年目を迎えました。在学当初は、課外活動中心の学生生活を送り、二回生から所属した日置ゼミでは経営学のゼミであるにも関わらず、まず文化人類学に関連する課題図書について議論することから始まったことに驚きを覚えたことを思い出します。後から振り返ると、日本の文化、風習、神話、それらの関連性等を学ぶことにより、日本の企業や消費者の行動の背景にあるもの、また日本と海外の違いを意識する動機付けを得ることが出来、在学中の研究や、その後の自身のキャリア上にも大きな影響を受けました。

卒業後は総合商社に入社し、化学品部門にて主にアジア・中東市場に向けた繊維原料の輸出、三国間貿易、中国での合弁会社設立プロジェクトを担当しました。基本的にB to Bのビジネスに携わってきたのですが、入社当時の上司の教えもあり、ビジネスの対象となる国の基本情報に始まり、歴史、宗教、人種、習慣、国民性などを学び、理解するなど、担当商品の関連

京大経済学部_同窓会報14号.indd 3　11.8.4 2:45:32 PM

市場を単純に理解することを超えた、市場への理解が必要であることを痛感させられました。Ｂｔｏ Ｂのビジネスとはいえ、ビジネスパートナーは顧客企業の役員であり、また顧客企業や川下企業の工場で働く労働者、最終消費者、など多くの「人」に影響を与えることになるため、それぞれの国の背景を理解する必要性は強調し過ぎてもし過ぎる事はありませんでした。

その後休職し、ハーバード・ビジネススクールで二年間の留学の機会を得ました。世界中から集まった優秀なクラスメートとの全五百のケーススタディーの議論を通して、様々な価値観や考え方、経営者としての意思決定のプロセスを学びました。卒業後は米国にて、ニューヨークに本社を持つ革製品ブランドに転職し、主に日本市場での消費者調査などを行う社内コンサルタントとして勤務しました。日本市場で成長を遂げ、次のステップを模索する重要な局面で、経営陣の意思決定プロセスに間近で関わることが出来た非常に有意義な経験でした。帰国後、コンサルティング会社を経て、現在はエグゼクティブサーチ会社にてコンサルタントとして勤務しております。

在学時からこれまでのキャリアを通して、違った歴史・文化・社会的背景や価値観を理解し、それらを踏まえた上でビジネスでどういった影響や付加価値を提供出来るかを考え、実施してきました。京都大学で学んだ経験がそれらの基礎を形成してくれたことに感謝し、今後も初心を忘れずビジネスを通してグローバルな社会に貢献できるよう研鑽して参りたいと考えています。

MBAで感じたこと

加地健一（平成十年卒）

私が卒業した一九九八年も今ほどではありませんが就職氷河期でした。外資系企業への就職に人気が高まった頃でしたが、私は敢えて日本式経営を体験したいと思い、某自動車メーカーに就職しました。約十年ほど海外部門での業務を経験した後、二〇〇八年に社費留学生として米国ＭＢＡの受験に挑戦しました。私は幼少と高校時代を海外で過ごしたので若干、語学面で有利だったものの、トップＭＢＡ校に合格するには並大抵の英語力では難しく、約一年間、受験勉強に励みました。仕事と受験の両立をなんとかこなし、ハーバード・ビジネススクール（ＨＢＳ）に合格し、一昨年よりボストンで学生生活を満喫しました。ＨＢＳでは成績を生徒間で相対的に三段階で評価し、最下位の評価が多い生徒は進学できないという厳しい基準がありますが、なんとか今年の春に卒業することができました。

留学しながら痛感したのは、いかに世界で日本の存在感が薄れてきているかということです。八〇年代のＨＢＳでは学年に最低二十名はいた日本人留学生が現在は半数以下です。ＨＢＳの有名なケース・スタディーの授業も以前は多くが日本を題材としていたのが最近は日本がテーマになっているものは片手で足りる程まで減っています。教員の分野でも日本人の存在は皆無に近く、二五〇人いるＨＢＳ教員のうち日本人教授は辛うじて一名いるという状況です。

昨年の会報で西村先生が日本の学生や大学の国際化に関して憂いておられましたが、私も強い警鐘を鳴らしたいと思います。知識が豊富で頭の回転が速い学生が多くても、彼らが世界の多様な文化や価値観を持つ人達と交流し、そこで新しい物事の見方を発見し、考えを共有したり発信することができなければ、日本は熾烈な競争を勝ち抜き、目まぐるしく変化する世界に対応することはできません。英語ばかりに拘る必要はありませんが「日本語以外で話す・聴く」という力を鍛え、日本以外の世界に触れ、国際人としての感覚を身につけた人材が経済の面から国を活性化することが望まれます。日本の経済的低迷やガラパゴス化が唱えられていますが、京都大学が日本や世界の将来を担う人材を育成し輩出する事をミッションとして掲げているのであれば、世界で通用する経済人の育成を今まで以上に意識して頂きたいと思います。少なくともＨＢＳに合格する日本人が東大と慶応の卒業生がほとんどで京大出身者は毎年一名程度という由々しき事態を改善したいものです。私は卒業後、派遣元の会社の日本の職場に戻りますが、留学で得た経験を元に弊社が熾烈な国際競争の中で生き残れるよう尽力したいと思います。

社会人生活を振り返って

野澤昌史（平成十七年卒）

平成十七年に経済学部を卒業し、同年から政府系の銀行に勤務して早や八年目になります。今般、卒業生だよりに寄稿させて頂く機会を頂きましたので、この場で大学・社会人生活を振り返ってみようと思います。

在学中は高校時代から興味があった都市・交通経済を学ぶべく、文ゼミにてお世話になりました。ただ、専ら体育会での活動とアルバイトに明け暮れ、パラダイス経済よろしく、全く勉強はせずに大学時代を過ごしてしまいました。今思えば、忙しい中色々なアルバイト（銀行での仕事には、祇園のバーでの経験が一番役に立ちました）を経験する中で、将来の仕事について、漠然としたイメージを持つようになりました。更に、自分の飽きっぽい性格も勘案し、色々な業界・会社の方と接点を持てる銀行という業界に、その中でも特殊な政府系の銀行を選択するに至りました。

入社後は東京本社で三年間、不動産会社を担当する法人営業セクションに配属され、不動産会社や所謂ＲＥＩＴ向けの融資、ノンリコースローン等を手掛けていました。当時はリーマンショック前のミニバブルとも言われていた時期で、入社後銀行業界の右も左も未だ分からない中、百億円単位の仕事の担当をしたり、新聞等のメディアに掲載されているプロジェクトにも関わったりと、「大きな」仕事をしていることの充実感はありました。ただ、当時は受け身の仕事が多く、且つ本当に自分の仕事が社会のためになっているか合点がいかない場面もあり、忙しさに感けつつも悩んでいたことを記憶しております。

その後、四年目から大阪の支店に転勤となり、引き続き法人営業セクションに異動となり、様々な業種を規模を問わず担当することになりました。担当会社との関係は一義的に私自身が責任を持つようになり、自分の父親以上に年齢が離れている社長から会社の将来について相談を受けたり、議論させて頂いたりと、本当に良い経験をさせて貰っているなあ、と思っています。一方、責任も重大ですから、担当会社の方が何を考えていて、私（が所属する組織）に対し何を求めているのか、また、先方が気付いていないことで何かアドバイス等ができることは無いか等、常に多方面にアンテナを張って仕事をしています。今思えば、京都大学、取り分け経済学部という自由な場で過ごした四年が、勉強以外の面で（申し訳ありません）今の自分に繋がっていることを実感しております。

最後になりましたが、京大経済学部の益々の発展を祈念し、卒業生だよりとさせて頂きます。

一年を振り返って

高田嗣人（平成二十二年卒）

私は、現在二年目になったばかりの信託銀行の銀行員です。在学中には遊喜先生と江上先生にお世話になりました。あまり授業に出る方でもなく、決して真面目に勉強をしてきた生徒ではありませんでしたが、ゼミでの勉強や同級生とのつながりの中で、社会人、特に金融業界で働く者として必要な金融経済の知識のベース・思考方法が身に染み付いているなと思うことが非常に多くありました。大学で学んだことが、直接生きる機会は社会に出てから多くはないとは思いますが、京大の自由の学風の中で自分から問題意識を見つけて学んだり、行動に移したりする姿勢は、社会人として仕事をしていく中で最も重要なスキルであり、京大で学んだことの一番の資産であると感じています。

現在私は、確定拠出年金という企業年金を企業に導入する仕事をしております。一年目でありながらも、東証一部のグループ会社や外資系日本法人など、現在進行中の案件を含めると三十六社の確定拠出年金の導入を担当しています。入った当初はできる仕事も少なく社会人としてやっていけるのか不安で仕方ありませんでしたが、自分より確定拠出年金を理解している同世代の人間は日本にいないのではないかと思うぐらい成長ができた充実した一年を過ごすことができました。また、企業年金制度という企業の福利厚生の根幹を担う制度の導入を担当する中で、どんな仕事も一人では成し得ることはできずお客様がいるからこそ自分の仕事があるのだということを痛感しました。今後はどうしていきたいかと問われると明確な答えが見つかってないのが現状ですが、どんな

京大経済学部_同窓会報14号.indd 4　11.8.4 2:45:32 PM

環境・状況になったとしても、お客様・チームの人など自分に関わる人に常に大切にしてもらえるような、周りに価値を提供できる人間でありたいと思います。

大学時代は十一月祭の実行委員をしていたため、十一月が近づく度に十一月祭の準備で駆け回った日々を思い出します。思い返せば十一月祭の開催にあたっても多くのひとの協力を得なければできないことだらけでした。何か大きなことを実現するには困難がつきものですが、周りのひとを巻き込んで少しでもお客様のために良いものを提供できるよう日々精進していきたいと思います。

私の研究

京都大学大学院経済学研究科　教授
岩本武和

今年度、新入生を対象とした少人数ゼミを担当し、そこで愕然としたことがありました。輪読していたテキストに、「失われた二〇年」という何気ない小見出しがあったのですが、一九九〇年以降に生まれた新入生たちは、この失われた二〇年しか知らない世代であることに気付いたからです。

テキストの内容は、一九七〇年代後半以降、マクロ経済学は、それまでの「ケインズ経済学」から、〈インフレは悪だ〉というスタンスから物価の安定を第一義的に考える「新しい古典派」に様変わりし、例えば中央銀行の独立性を高めたり、インフレ・ターゲッティング政策を採用したりすることによって、八〇年代以降、多くの先進国では物価は安定してきた、というものでした。これを読んでいる新入生は、インフレは悪だと言われても、デフレしか知らない世代なのです。長年若い学生を教えていると、自分にとって現代に属する出来事も、彼らとっては歴史に関する事柄も多々あることに気を付けながら教えてきたつもりなのですが、彼らがインフレを知らない世代であったことに気付かなかったことは迂闊でした。

自分の研究について書くように与えられた紙面を、教育にする話題から始めたのは、そうが私の研究歴に少なからず関係しているからです。私が大学院入学したのは一九七〇年代の後半、大学院の修士課程から博士課程に進学したのは八〇年代前半のことでした。さきほどの書いたように、この時期、伝統的な「ケインズ経済学」は一掃され、同じ時期にアメリカで学んでいた私と同世代の研究者たちは、「新しい古典派」マクロ経済学を摂取してきました。同じ時期に、私は京大の大学院で「古い新古典派経済学」と「伝統的なケインズ経済学」を学ぶという教育を受けていました。最先端の理論を摂取しそれを進化させることが研究者の社会的使命であるとするならば、私はそれを疎かにしてきたという忸怩たる思いと、恩師から『一般理論』を原書でレクチュアを受け、そのことによって、私のケインズ経済学に対するスタンスが確立されたという僅かな自負が入り交じっております。

ところで、私が専門的に研究を開始した一九八〇年代からすでに三〇年近くが経過しましたが、その間、ちょうど十年に一度、三回の大きな経済危機が発生しました。第一は、一九八五年のプラザ合意後の八七年に発生したブラック・マンデー、第二は、一九九七年のアジア危機と年末の山一倒産をきっかけに危うくなった日本の金融危機、第三は、二〇〇七年のベアースターンズの破綻から〇八年のリーマン・ショックに至る世界金融危機。この三回の経済危機を、私は研究の糧（飯の種）にしてきました。

第一の危機をきっかけに、「国際金融」を自分の研究対象にしようと思いました。まだ大学院生の頃で、プラザ合意後に起こった現象のいくつかは、それまで勉強してきた経済理論では全く理解不可能でしたので、それらに関する論文をいくつか書きました。国際金融の理論や政策は、各国の制度や時代のレジームによって大きく変化するので、ある程度歴史を遡って勉強しました。そして、これらの時代の制度設計に大きく関わっていたのがケインズであることを知り、戦間期のエポックメーキングな出来事を、ケインズの残した処方箋を軸に検討するという論文をいくつか書き始めました。

第二の危機をきっかけに、それまでの反ケインズ的潮流から、明らかにケインズ見直しの風潮が現れました。そして、それまで書き貯めてきた論文を早く仕上げなければならないという思いに駆られ、それらを『ケインズと世界経済』（岩波書店、一九九九年）という本にまとめました。処女作『インドの通貨と金融』から遺作『アメリカの国際収支』に至るまで、ケインズの主要な関心事は国際金融であり、その意味で、拙著のように、ケインズの生涯全ての時期に渡って、彼が関わった国際金融の制度設計の全てを扱った類書は他になく、これによって博士学位を取得することができました。

これと相前後して、ケインズ的なスタンスから新しい国際金融の制度設計を提言した『IMF資本自由化論争』（岩波書店、一九九九年）と『金融グローバル化の危機―国際金融規制の経済学―』（岩波書店、二〇〇一年）という翻訳本を出版しました。「ケインズ的なスタンス」と書きましたが、その一つに「金融は実体経済に対してアンチシクリカル（景気循環相殺的）でなければならない」という考え方があります。しかし、「バブルとその崩壊」を繰り返している現代は、「金融が実体経済に対してプロシクリカル（景気循環増幅的）に作用している」という指摘（例えばBIS規制に対してよく言われる事柄）があります。こうした問題意識から、「国際資本移動のプロシクリカリティに関する研究」というテーマで科学研究費を得て、資本移動や為替相場制度に関する論文をいくつか書きました。

さて第三の危機が勃発する直前に、「アメリカ経常収支赤字の持続可能性」という学会報告を行いました。フローで見ればアメリカは記録的な経常収支赤字を継続させているが、ストックで見ればアメリカの対外投資ポジションは改善しています。これが意味することは、アメリカは一国全体で巨額の評価益を稼ぎ出していることですが、その後の金融危機で、この評価益は吹っ飛びました。こうした問題意識から、現在「評価効果による対外調整メカニズムに関する理論的・実証的研究」というテーマで科研費を得て、その成果の一部は、昨年の同窓会総会での講演会で報告させていただきました。

今は、来年四月に『国際金融論』というテキストを単著で出版すべく準備を進めています。これまで自分の拙い講義の受講生や、一五〇名を超えるゼミの卒業生たちがいたからこそ、こういう仕事もできているのだと感謝しております。

出版案内

『産業発展・衰退の経済史―「一〇大紡」の形成と産業調整』（有斐閣）

京都大学大学院経済学研究科　准教授
渡辺純子

昨年末に拙著『産業発展・衰退の経済史―「一〇大紡」の形成と産業調整』（有斐閣）を刊行しました。本書は、戦前から戦後復興期にかけて日本の主要産業の一つであった綿紡織業が成熟・停滞していくプロセスを追い、そのなかで企業のM&Aや非繊維への多角化・事業転換、あるいは退出（被合併・廃業・倒産）が緩やかに進行していたことを明らかにしました。また、それと関わる国内外の政策についても言及しています。

本書の根底には、そうした現象の経済学的含意を考察したいという問題意識があります。個々の企業経営というミクロレベルでは、環境変化にいかに対応し継続企業として存続するかは重要な経営課題です。あるいは、参入と退出という活発な開廃業によって変化に対応するパターンもあります。そうした個々の企業行動が寄り集まって日本経済全体としての経済活動に影響を及ぼしているわけですが、一国の経済全体というマクロレベルでは、資本や労働などの資源（ヒト・モノ・カネなどの経営資源）が効率的に配分されているかという点も重要です。衰退しつつある低生産性部門の産業や企業から、成長しつつある高生産性部門の産業や企業へと資源が移転されることが、経済成長につながるからです。綿紡織業界には、かつてのカネボウや東洋紡のように戦前から一世紀近くにわたって存続し、工場や土地など膨大な資産をもっていた企業も多いので、これら

の経営資源がどのように転換されたかという問題は検討に値すると思います。

本書は、こうした産業の調整局面を厳密に実証分析したわけではなく、その本格的な研究のための予備的作業として、日本の綿紡織業の長期的推移をオーソドックスな経済史の分析スタイルでまとめたものにすぎません。対象時期も、成長から衰退の過渡期である一九四〇～六〇年代が中心です。しかし、右に述べた問題意識を含めて多くの方々と議論を深め、今後の日本経済のあり方を考える足がかりにしたいと願っています。

本書刊行後、セミナーや研究会などで、いろいろな方とお話をする機会がありました。そのなかでクローズアップされることの一つに、「市場か組織か」という問題があります。主流派経済学者は、産業の衰退化への対応は基本的には企業や労働者の自助努力、市場メカニズムに委ねるべきだと考えています。私もこの基本原則に異を唱えるわけではありませんが、現実を見渡すと「市場」以外の「組織」の部分が大きく、一定の役割や機能を果たしているように見受けられます。たとえば、綿紡織工場を閉鎖する場合でも、大手紡績会社の労働者は他工場への配置転換によって雇用保障されることも多かったのです。衰退産業に対する政策的支援も、広い意味での「組織」にあたります。「組織」は、市場メカニズムの冷徹さを緩和し、産業の衰退にともなって発生する社会的コスト（長期的失業が典型）を小さくするメリットがあるように思われますが、ぬるま湯的で非効率な状態を温存する傾向があることも否めません。

私は、両方のバランスを具体的に検討することが重要と考えています。大企業による企業組織内での調整がある一方、競争的な開廃業があるのも望ましいといえます。また、労働者の権利を守りつつ、長期雇用制度と労働市場を適切に組み合わせることが必要だと思います。政策的な介入も、チェックのしくみを確立すれば、有効に機能する可能性があります。

経済学者の本来の研究目的は、経済成長率の数字それ自体を自己目的化することではなく、どのようなシステムが人々の幸福度を高めるかを経済面から考えることにあると思います。本書を一つのステップとしながら、この目標に向かって微力ながら進みたいと思っています。

退任教員の紹介

平成二十三年三月三十一日　退職
大学院経営管理研究部・経済学部教授

岩城　秀樹

一九九三年　三月　一橋大学大学院商学研究科博士課程
二〇〇八年　七月　京都大学博士（経済学）
二〇〇八年　十月　京都大学大学院経営管理研究部教授（二〇一一年三月まで）
主要著書『確率解析とファイナンス』

平成二十三年三月三十一日　退職
大学院経済学研究科講師

櫻田　忠衛

一九七二年　三月　立命館大学卒業
一九七二年　四月　京都大学経済学部助手
二〇〇一年　四月　京都大学大学院経済学研究科講師（二〇一一年三月まで）
主要著書『経済資料調査論の構築―京都大学経済学部での試み―』

櫻田先生は、二〇〇一年四月より二〇一一年三月まで同窓会本部常務理事として長い間、同窓会におかれましても多大なご貢献をされました。

新任教員の紹介

経済学研究科・経済学部教授
加藤　康之

就任年月日
平成二十三年四月一日
担当講義科目
学　部／経営財務
大学院／ファイナンス、金融工学と実務、ワークショップⅠ、Ⅱ
出生地・生年月日
東京都新宿区
一九五五年三月二十五日
感想・抱負等
一九八〇年に東京工業大学大学院を修了した後、（株）野村総合研究所および野村證券（株）にて計三十年間にわたり勤務してまいりました。その間、一貫して金融工学・ファイナンス理論の研究とその実務への応用を手掛けてまいりました。

実は私がこの分野に関わり始めた八〇年代初頭には金融工学という言葉は存在しませんでした。それから、金融経済の大膨張とともにバブルからリーマンショックに至るまで目まぐるしい三十年間でした。その間、シカゴ、ニューヨーク、ロンドン、ムンバイにて計八年間の海外勤務も経験し、国際金融の熾烈な研究開発競争にも接してまいりました。

金融工学やファイナンス理論の歴史は経済学の中では短く、主要な理論の導入から六十年弱しか経っていません。今、第一世代であるパイオニア達の成果を消化しやっと第二フェーズに入ろうとしている若い学問です。激変する世界の金融に京都から情報発信してまいりたいと思います。

経済学研究科・経済学部特定准教授
後藤　康雄

就任年月日
平成二十三年四月一日
担当講義科目
学　部・大学院／三菱総研共同研究講座講義（アカデミック・イノベーション）
出生地・生年月日
福岡県北九州市
一九六四年八月十八日
感想・抱負等
民間シンクタンクの三菱総合研究所から、二年間の予定で出向させて頂くことになりました。大学卒業後、まず日本銀行に就職、その後三菱総研に転籍し、ほぼ一貫して調査・研究畑を歩んできました。

日銀や三菱総研では、金融やマクロ経済など幅広い領域を対象にしてきましたが、動きの激しい内外経済が相手なだけに、どうしても〝反射神経〟を求められがちだったのが実情です。今回、わが国を代表する経済学研究の拠点である京都大学に籍を置ける機会を頂きましたので、腰をすえた研究を行い、社会への発信の基礎を築ければとの思いを持っています。特に、経済の成長基盤としてのイノベーション力について、基礎研究のレベルにまで立ち返って検証や提言ができないかと考えています。もちろん自分の研究だけでなく、実務経験を生かし、微力ながら教員や学生の皆様のお役に立てれば大変うれしく思います。ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

京大経済学部_同窓会報14号.indd 6　11.8.4 2:45:33 PM

経済学研究科・経済学部講師
末石直也

就任年月日
平成二十二年九月一日

担当講義科目
学　部／計量経済学
大学院／中級統計学、英語計量経済学

出生地・生年月日
岡山県
一九七九年二月一日

感想・抱負等
昨年九月に経済学研究科に着任して以来、計量経済学の研究・教育に携わっています。私は本学経済学部の卒業生で、学士と修士を京都大学で取得しました。その後、アメリカの大学で博士号を取得し、日本帰国と同時に本学に着任しました。再び母校に戻ってくる機会を得て、うれしく思っております。

私の専門分野は、モデル選択と呼ばれる統計学の一分野です。経済主体の行動をモデル化しようとする際に、候補となる統計モデルが複数存在し、且つ、経済理論からはどのモデルが最適なのか決定できないような状況が往々にして発生します。そのようなときに、観察された経済データに基づいて、現実を最もよく近似するモデルを選択する方法を研究しています。

私は研究者・教育者としてはまだまだ駆け出しですが、微力ながら京都大学経済学部の発展のため努力してまいりますのでどうぞよろしくお願いいたします。

各支部からの便り

東京支部

懇親会で挨拶する和田支部長

例年通りなら、この文章は三月の支部総会の報告から始まるのだが、三月十一日の東日本大震災により、支部総会を三月十九日から九月十七日（土）へと半年延期したので、今回は本来ならそこでお披露目となる予定だった「支部長交代」の儀から始める事になる。

（一）新支部長に和田紀夫氏（S三十九年卒）が就任

西澤宏繁氏（S三十六年卒）が昨年十一月の年次総会で経済学部同窓会長に就任したが、㈱企業再生支援機構の社長であり、この時勢では難題も続く事から、かねて支部長の交代が求められていた。本年四月一日から、和田紀夫氏が支部長を引き継ぐ事になった。なお副支部長の岡野 徹氏（S三十八年卒）も退任された。

堀先生のお話を（3室つなげて）

後任の和田氏は日本電信電話㈱（NTT）の会長であり、やはり西澤氏に劣らず多忙ではあるが、同社が京都大学と包括提携をしていることでもあり、万難を排すという決意で支部長を引き受けられた次第である。新支部長のもとで、一層の発展を図りたい。

（東京支部の事務局を合田（S三十五年卒）が八年間担当してきたが、任期を来年三月末とし、後任は宇野 輝氏（S四十一年卒）となる。この一年間オーバーラップして引き継ぐことになる。皆様のご支援をお願いしたい。）

（二）経済懇話会の新しい企画

六月二十五日（土）に第三十五回の経済懇話会が京大東京オフィスで開催された。新支部長の和田紀夫氏の挨拶のあと、堀和生教授が「経済史から東アジアをみる」という演題でお話され、熱心な質疑応答の後、懇親会に移った。

経済懇話会の会場を学士会館から品川オフィスに変更して六回目になるが、出席者は二割増、平均百二十名である。不自由な点はまだ多いが、皆さんのご協力で盛会が続いている。他の学部OBの参加も増えている。

年三回開催で今回で三十一回、大学のご支援で十一年目を迎えた事になるので、今後の展開について大学からのご提案を受け、協議した結果、講師の起用について、「二回は京大の教員。経済学部主体だが、経済研究所、法学部等の先生も対象とする。残り一回は、京大経済学部出身者。他大学の先生、実業界等の現役・OBより起用する。」事になった。皆さんのご要望も伺いながら、より活性化を図ってゆきたい。次回は十月二十九日（土）で、講師は京都大学経済学研究科　諸富 徹教授です。

（三）九月十七日（土）の支部総会の案内

講師の猪木武徳氏（国際日本文化センター所長）が快く再登板をお引き受けくださった。今回の演題は「個人の心理と文化現象―社会科学の視点から」に決定。場所は学士会館。午後二時講演開始、午後三時から総会、懇親会で五時終了予定。会費は五千円。大勢ご参加頂き、元気で楽しい会にしましょう!!

合田隆年（昭和三十五年卒）

懇親会での交歓光景

名古屋支部

平成二十三年六月に名古屋支部の理事・幹事会を開催し、本年度の事業について、支部総会の開催と、理事・幹事の異動に伴う補充人事の二件について協議した。

まず第一の支部総会の開催については、これまでの実績が三～四年に一回の開催となっており、本年十月名古屋開催（案）を目指して準備を進めることにした。過去二回の出席者数は約八〇名、五〇名であり、会員総数六〇〇名に対し一〇%前後である。今回は、同窓会本部から愛知、岐阜、三重三県に在住の卒業生名簿を送って頂き、案内状送付にとりかかる予定である。

第二の理事・幹事の異動に伴う補充人事については、幹事の一名が本年四月に大阪へ転勤されたこと、および健康上の理由で職務遂行に支障が生じると懸念される役員があることなどのために、後任の人事を進め、支部理事・幹事会の組織強化を図ることに合意した。

支部活動については、最重要事業である総会開催に改善すべき課題があり、事前準備の主幹事の経験によると、「六〇〇人全員への往復はがきによる案内」や「ホテルでの立食パーティー」に、規模の経済性が働いていないとのことである。この支部便りは全会員に送られるので、情報提供の場として大いに活用していきたいと考えている。

眞継 隆（昭和三十四年卒）

大阪支部

理事会・幹事会の審議の様子

平成二十三年一月二十八日（金）、理事・幹事会が、大阪ガスビルにて開催された。当日は、ご来賓の先生三名、理事・幹事十九名に加え、オブザーバーとして京滋奈支部の田中様（S三十八年卒）と大川様（S四十七年卒）、神戸支部の野尻様（S四十四年卒）に同席頂き、計二十五名にて審議が進められた。

出田支部長（S四十五年卒）からの挨拶の後、役員交代、平成二十一年度会計報告等の審議の後、大阪支部・京滋奈支部・神戸支部の統合について審議がなされ、平成二十三年度より三支部を統合することが決議された。

その後、第二十回総会が、七十六名の出席のもと、ガスビル三階ホールにて開催された。ご来賓の先生方のご紹介、出田支

京大経済学部_同窓会報14号.indd 7　11.8.4 2:45:33 PM

盛況となった第20回総会

部長から理事・幹事会の報告と挨拶、同窓会本部・理事長の田中秀夫経済学部長のご挨拶、平成二十二年度より同・常務理事に新任された江上雅彦教授のご挨拶の後、前任の同・常務理事である櫻田先生より、同窓会の活動状況についてのご報告および退任のご挨拶をいただいた。講演会では、京都大学経営管理大学院の岩城秀樹教授より、「金融危機と金融工学」というテーマでご講演をいただいた。また、大森理事（S三十三年卒）より、京都大学・東アジア経済研究センター協力会関係の報告があった。

引き続き、懇親会が、七十五名の出席のもと、ガスビル食堂にて開催された。前大阪支部長の河合理事（S三十九年卒）のご挨拶と乾杯のご発声を皮切りに、さまざまな職種や異なる卒業年度の会員同士で盛んに情報交換が行われ、小塚副支部長（S四十七年卒）の中締めで、大盛況のうちに幕を閉じた。

大阪支部では、今回の京滋奈支部・神戸支部との統合を機に若年・中堅層への会員層拡大への試み等を通じて、京阪神地区におけるさらなる会員数の増加と若返りを図り、支部の活性化を進めていきたいと考えている。

【大阪支部　連絡先】
・大阪ガス株式会社　秘書部気付
・〒五四一―〇〇四六
大阪市中央区平野町四丁目一番二号
・電話番号
〇六―六二〇五―四五〇一
・FAX番号
〇六―六二〇五―七二七五
・メールアドレス
zenzo-ideta@osakagas.co.jp
出田善蔵（昭和四十五年卒）

情報交換に花が咲く懇親会

神戸支部

六月二十三日に十一名が参加して同窓会が三宮「たじま路」で開催された。京都大学経済学部の神事直人准教授からは教授陣の動向、経済学部の活動、学生の同窓会への入会の状況などをご説明頂いた。

神戸支部総会

昨年秋以降、大阪支部、神戸支部、京滋奈支部統合の話が持ち上がり、神戸支部理事会も統合賛成を決めており、その経過報告がなされた。神戸支部の所帯は登録会員が約五十名と大きくはないが、毎年の同窓会・懇親会は、在神戸主要産業の役職者また大学教授などが参加し、卒業年次を越えて和気藹々の雰囲気のもとに開催されてきた。したがって三支部統合の後も、神戸地区としての同窓会は継続していくことが確認された。しかし、近年、神戸の製造業のリーダー的役割を果たしてきた川崎重工や神戸製鋼所をはじめとする企業からの参加が減少しているため、今後、これら企業の同窓生への働きかけをしていくことになった。

参加者の近況報告では、神戸支部長である本山美彦さんが大阪産業大学学長に就任されたがアドミニストレーションで多忙を極めているとの報告があった。前支部長の板東慧さんは八十歳を越えられているが執筆を今も続けられている元気さを披露。多忙を極めるシスメックス社社長の家次恒さんは翌日に株主総会を控え、忙中閑ありでの出席。関西学院大学国際学部の設立に尽力された伊藤正一教授はグローバル人材育成への抱負を語られた。

これから三支部統合が具体的に進められるが、単なる組織の量的拡大に終わらせることがないように、インターネット・イントラネット活用では先進的な働きをしている海外の大学同窓会活動をも参考にし、同窓会活動の目的、戦略の検討を含めた質的な充実に取組む必要がある。そのためのツールとしてホームページの充実、ソーシャルネットワークの積極的活用を是非とも実現させたい。

【神戸支部　連絡先】
・㈲パフォーマンス・マネジメント研究所気付
・電話番号／FAX番号
〇七八―五八一―二三一八
・メールアドレス
nojirijin@iijmio-mail.jp
・野尻賢司（昭和四十四年卒）

九州北部支部

一．会員数
二〇〇名程度
地元企業・地方自治体等への就職者を中心に、東京・大阪に本社を置く企業の九州北部地区勤務者等により構成。

二．役員氏名
支部長：鎌田　迪貞（昭和三十三年卒　九州電力（株）相談役）
理　事：黒瀬　和男（昭和三十年卒）
理　事：橋本　剛（昭和四十三年卒）
理　事：藤永　憲一（昭和四十八年卒　九州電力（株）取締役常務執行役員）
理　事：薬真寺偉臣（昭和五十一年卒　九州電力（株）執行役員）
理　事：花田　恭一（昭和五十三年卒　（株）福岡スポーツセンター代表取締役社長）

三．総会・懇親会
・例年五月に年一回の総会・懇親会を開催。今年度は、出席者の参加し易さ等を考慮し、恒例の水曜日から金曜日に変更して開催し、二十名が参加した。（五月二十日（金）、於ホテルニューオータニ博多）
・総会では、鎌田支部長からの挨拶の後、ゲスト参加いただいた矢野　剛准教授から、大学ならびに経済学部・経営管理大学院の近況などをご紹介いただいた。

九州北部支部総会

・その後、恒例となっている参加者全員による自己紹介を行った。一年ぶりの再会となったメンバーは、学生時代の思い出や京都への思いのほか、最近取り組んでいる仕事のことなど近況を報告しあい、懇親を深めた。
・近年の参加者数はほぼ一定の水準を保っているが、毎年、数名の若年層が新たに参加している。九州新幹線の全線開業に伴い、同窓生が一同に会しやすい環境に近づいていると考えられるため、引き続き、本総会以外の懇親会の開催や、総会開催日程や場所の工夫等を通じ、同窓生の掘り起こしおよび総会・懇親会への新規参加者増に一層努めたい。

四．役員会
・適宜、役員会・懇親会を開催して、大学や同窓会本部の状況などについて情報交換を行っている。

五．その他
・今後も、同窓会本部と連携を図り、同窓会の発展に努めたい。

【九州北部支部　連絡先】
・九州電力株式会社　経営管理本部
・〒八一〇―八七二〇
福岡市中央区渡辺通二丁目一番八二号
・電話番号
〇九二―七六一―三〇三一
・FAX番号
〇九二―七一六―一〇九四
・メールアドレス
Keisuke_Shimozuru@kyuden.co.jp
下水流圭祐（平成十三年卒）

九州南部支部

第十五回九州南部支部同窓会総会は、平成二十三年七月十六日(土)に鹿児島県鹿児島市内の城山観光ホテルで開催された。当日の総会出席者は十三名であった。

一．総会

総会では、瀬地山敏支部長による挨拶の後、支部運営に関する事項の確認並びに報告が行なわれた。引き続き、同窓会事務局本部からお迎えした経済学研究科・経済学部准教授の草野真樹氏から、学部や研究科の近況などについてご紹介いただいた。

▽役員（理事・幹事）について

平成二十三年度の役員は次のとおり。

支部長：瀬地山 敏氏(昭和三十五年卒 鹿児島国際大学 学長)

理事：熊本県理事 林田素行氏(昭和四十四年卒、林田公認会計士事務所所長)、宮崎県理事 岡野 徹氏(昭和三十八年卒、旭有機材工業㈱相談役)、鹿児島県理事 丸元貞夫氏(昭和三十八年卒、阪東機工㈱代表取締役会長)

会計監事：中村隆之氏（平成八年卒、鹿児島国際大学経済学部准教授）

九州南部支部総会

二．講話

京都大学防災研究所火山活動研究センター准教授の井口正人氏（京都大学理学部S五十六年卒）より、「火山噴火予知にニーズはあるのか？」と題して、約一時間ご講話をいただいた。井口氏は火山災害の要因、火山噴火予知が必要となるケースなどについて鹿児島県桜島火山を主な事例として詳細に説明されすべての自然災害に言えることとして、自然災害の可能性について理解することの重要性、住民の自主的な判断の重要性、日頃の備えの重要性、防災意識を持ち続けることの重要性等について強調された。

三．懇親会

懇親会は、海江田順三郎氏（S二十八年卒 高島屋開発㈱相談役）の乾杯により開宴。出席者それぞれの近況報告、学生時代の思い出話、今後の展望などについて、酒盃を交わしながら歓談が行われた。閉会に際しての一本締めは、阪本博志氏（H十年卒 宮崎公立大学准教授）により行われた。

【九州南部支部　連絡先】

・鹿児島国際大学経済学部（富澤研究室）

・〒八九一―〇一九七

鹿児島市坂之上八―三十四―一

・電話番号

〇九九―二六三―〇七一七

・FAX番号

〇九九―二六一―三六〇六

・メールアドレス

tomizawa@eco.iuk.ac.jp

富澤拓志（平成二年卒）

京都大学経済学部 卒業五十周年記念総会

（昭和三十六年卒）

西尾隆一（E3）

二〇一一年五月三十日（月）午後一時、京大百周年時計台記念館・国際交流ホールにおいて、進行役の小林正博氏（E4）の司会で我々三十六年卒の「卒業五十周年記念総会」が始まりました。参加者は四クラス合計で八十九名で当初定員（二百人）の四割以上ですから、この種の会合としては非常に高い出席率と言えましょう。

☆　☆　☆

最初にこれまでの経過をお話ししましょう。百周年時計台記念館・国際交流ホールにおいては、昭和三十二年卒から始まり、三十三年卒、三十四年卒、三十五年卒と立派な「五十周年記念総会」をやられたので、三十六年卒も続けて欲しいという声があり、有志が準備を始めたのが昨年の秋頃でした。其の上に三十六年卒（E2）の西澤宏繁氏（企業再生支援機構社長）が京大経済学部同窓会会長でもあるので、我々の年度でこれを絶やすことはできないと開催を決めました。

E1．京大時計台会場にて
（二次会は円山公園の左阿彌。翌日は伏見、万福寺、平等院へ）

しかし、我々三十六年卒はクラス単位の会しかなく、あるクラスは五十年間に一度も集まったことも無く、名簿すらない状態で、全体の積立金もまったくありませんでした。

各クラスから世話人（計八名）が選ばれ、第一回の世話人会が開かれたのが、年末の十二月十六日でしたから、あまり時間がありません。本当にできるだろうかという危惧がありましたが、世話人の井上 譲氏（E2）のリーダーシップと各世話人の絶大な協力で開催日が五月三十日（月）と決まりました。

「開催の予告、当日の二次会、宿泊の手配、翌日の懇親行事、最終案内、出席者名簿の作成」等は、クラス単位で行うことになり、当日の役割分担は主として世話人が全員で行うことになりました。残り半年間で本当にやれるかと危惧しましたが、各世話人は全て企業の幹部経験者で、昔取った杵柄で見事にやり遂げられ、当日は大変スムースに進行できました。その間会議こそ僅か二回でしたが、皆パソコンを駆使してこれが大変な武器となりました。

予算面については無駄を省き、当日決算をして、会費一万円の内、残金を出席人数に応じてクラス世話人に返し、立替金の返済等に充当してもらいました。

☆　☆　☆

当日の総会の模様をお話ししましょう。最初に、五十年前、一緒に入学しながら今日の記念総会に参加することなく亡くなられた学友二十九名と、東日本大震災で亡くなられた多くの人の御冥福を祈り、黙祷が行われました。次に小林氏より、世話人のE1　片山、塩路、E2　井上、滋賀、E3　西尾、幾野、E4　小林、大谷の各氏の紹介が行われました。

E3．京大時計台会場にて（二次会は新・都ホテルにて）

開会の挨拶をE2の西澤宏繁氏（経済学部同窓会会長で企業再生支援機構社長）が行い、来賓として田中秀夫学部長から挨拶をいただきました。また、経済学部同窓会の江上教授、担当の田村さんの紹介も行われ、その後、E2世話人の井上氏が乾杯の音頭を取り、懇親に移りました。

会場設営は「京大生協」、飲食は時計台下のレストラン「ラ・トゥール」にお願いしました。

着席フランス風ビュッフェにして、量より質でクラス単位でテーブルに着き、久方ぶり、人によっては五十年ぶりの再会を喜び、話が弾んだようです。

出し物として、合唱歴五十年以上というE2の坂井さんの御尽力で、著名な京大OB合唱団「アルマ・マータ・クワイア」の代表の増田さん、指揮者の角家さん等、十七名の素晴らしいコーラスをお聞きした後、全員で「紅もゆる」「琵琶湖周航歌」を合唱しました。

その後、菊池光造元経済学部

E2．京大時計台会場にて
（ブライトンホテルで二次会。翌日、有志10名が瀬田ゴルフにてプレー）

E4．京大時計台会場にて
（同日18：00よりKKR「くに荘」にてクラス会）

京大経済学部_同窓会報14号.indd 9　11.8.4 2:45:35 PM

長（E2）の閉会の挨拶、各クラス毎の記念撮影が行われ、午後三時に記念総会が無事終わりました。

☆　☆　☆

当日の夕方から、各クラス毎の懇親会が市内のホテル、料亭等で行われ、少人数のアットホームな雰囲気で宇治分校、吉田分校時代に返って、飲み、食い、語り合いました。

翌日は各クラス別にゴルフ、観光、見学等にでかけました。

皆さんこの記念行事に参加できた喜び、特に健康の有難さをかみしめ、何年かして又集まることができたらいいなあと思いながら、お別れしました。最後に経済学部同窓会事務局、各世話人をはじめ、皆さんの御協力に心からお礼を申し上げます。

一一会（故　小野一一郎ゼミ生の会）活動報告

我が恩師小野一一郎先生は、平成元年三月京都大学教授を定年退官、その後、阪南大学に勤務され、七十歳で定年退職されました。翌年、平成八年十二月七日に、七十一歳、肺炎で急逝されました。

ご健在中も一一会の活動は盛んに行われていましたが、亡くなられた後も宣代奥様が、ゼミ生皆の顔と名前を覚えて頂いており、メンバーの住所もしっかり管理して頂いているお陰で、一一会の集いを途切れることなく、今日まで開催することが出来ました。

そして、昨年の平成二十二年六月十二日に「故小野一一郎教授ゼミ開講五十周年一一会の集い」が、小野先生の住居に近い奈良春日ホテルで、約七十名の参加を得て盛大に開催されました。ちょうどその時の奈良は、平城遷都一三〇〇年記念事業で市内中が賑わっていました。記念事業協会の常任理事・事務局長が、小野ゼミ第十六期（昭和五十二年卒）の林洋氏だったので、彼の計らいでマスコット人形「せんとくん」がホテルに来てくれ、会は一層盛り上がり、楽しく、なつかしい内に、お開きとなりました。

小野一一郎先生の急逝後から、現在までの一一会の活動状況について報告いたします。小野一一郎ゼミは、安保闘争が激しい昭和三十五年に、先生が助教授の時に十名で開講されました。それから五十年が経ちました。昭和三十七年、その第一期生卒業後、平成元年第二十八期まで二百三十九名が卒業しました。その正式会員以外に、大学院関連を中心とした約三十名の特別会員も、一緒に集まってきました。

先生急逝後、翌年の平成九年十一月二十四日に「偲ぶ会」、平成十二年十二月二日に京都で、翌三日に東京で「小野一一郎先生著作集（全三巻）出版記念会」を開催しました。その後、平成十四年十二月八日「七回忌の集い」、平成十八年十二月十七日「十年忌の集い」、平成二十年十一月二十九日「十三回忌の集い」、そして前述の昨年の「ゼミ開講五十周年の集い」と続いてきました。

ゼミ各年次毎の集まりはそれぞれ行われていますが、今述べたのは第一期から第二十八期までの正式会員二百三十九名プラス特別会員約三十名という全体的なものであり、各集いとも七十名から八十名の参加者でした。もちろん、亡くなられたメンバーも居りますが、大部分はまだまだ健在で、宣代奥様や、娘さん息子さん達と、何年かぶりにお会いするのを、皆楽しみにしています。

今後、当面の予定としては、平成二十四年の十七回忌の集いが考えられています。

奥様がご健在の間は、一一会の全体の活動を続けていきたいというのが、ゼミ生皆の声です。

吉村昭道
（第五期・昭和四十一年卒）

故　小野 一一郎教授ゼミ開講50周年一一会の集い
（奈良春日ホテル）

東京での卒業生の交流の場に
京都大学東京オフィスをご利用ください。

京都大学
KYOTO UNIVERSITY

「京都大学東京オフィス」は、京都大学の東京における情報の収集及び発信の拠点として、JR品川駅から至近に位置する「品川インターシティ A 棟27階」に設置されています。品川は新幹線に直結し、また羽田空港の国際化ともあいまって、国内はもとより、世界とも繋がる拠点ともなっています。

東京オフィスには、卒業生をはじめ、教職員、学生が無料で利用できるラウンジ、ミニラウンジ、パソコンを備えたワークスペースがあり、また、同窓会、各種セミナー、フォーラム、研究会などに利用できる会議室を３室（有料）ご用意しております。

ラウンジ

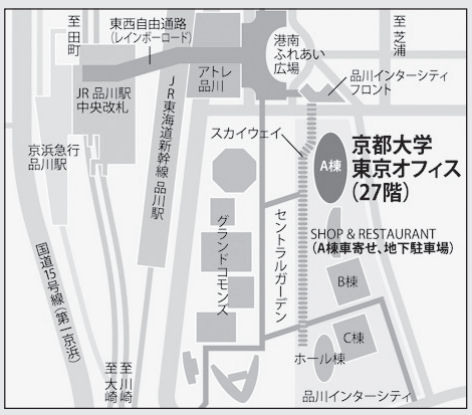
ミニラウンジ

会議室

卒業生の皆様には、同窓生との交流や母校との連携を深める場として、東京オフィスを大いにご活用頂きますようお願い申し上げます。

東京オフィススタッフ一同、卒業生の皆様のご来館を心よりお待ちしております。

■開館日・利用時間
月曜日から土曜日までの毎日　10:00～20:00
■休館日
日曜、祝日、年末年始（12月28日～1月3日）、創立記念日（6月18日）、その他臨時休館する日
■詳細
URL http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/tokyo-office
■所在地
京都大学東京オフィス：
〒108-6027　東京都港区港南2-15-1　品川インターシティ A棟27階
■お問合せ先
TEL 03-5479-2220（開館日の10:00～19:30）　FAX 03-5479-2221
E-mail t-office@www.adm.kyoto-u.ac.jp



アクセスマップ